

Title	ソヴェート同盟に於る「一國社会主義建設論」への思想的発展： コミンテルンの崩壊過程の一観察
Sub Title	
Author	橋本, 勝彦
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.5 (1934. 5) ,p.645(61)- 683(99)
JaLC DOI	10.14991/001.19340501-0061
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340501-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソヴェート同盟に於る

「一國社會主義建設論」への思想的發展

——コミンテルンの崩壊過程の一觀察——

橋 本 勝 彦

現在コミンテルンの存在は一のディレンマに陥つてゐる。これは何れの方面からも指摘せられてゐる。露西亞革命に續く數ヶ年間にその對外政策に於て極度の積極的態度を示してゐたソヴェート同盟も西歐諸國に於るその企圖の失敗挫折によつて、其後これら諸國の狀態に關せずソヴェート同盟自體の建設に全力を集中して着手する様になつた。現在行はれてゐる五ヶ年計劃の如きも斯る態度の現れとして理解し得る。この計劃遂行の爲めにソヴェート同盟は現在資本主義諸國との正常的平和關係を翹望し、これが實現に非常な精力を拂つてゐる。然し斯くの如き事情は又諸國に於る社會運動の現勢から頗る無力なものとなつてゐるコミンテルンを更にソヴェート同盟の對外政策に於ては一つの無用物となして終つてゐる。本稿はコミンテルンの斯様な存在への過程をトロツキーの永久革命論とスタリンの一國社會主義建設論との對立、鬭争から觀たものである。尙諸國の社會運動の衰退に關する具體的事實の説明は紙數の關係上可及的に省略した。この詳細な説明に就ては Arthur

Rosenberg: Geschichte des Bolschewismus Berlin 1932 或は河合榮治郎氏「コミンテルンの崩壊」(社會政策時報第六十二號)等を参照せられ度。

ソヴェート社會主義聯邦は現在幾多の新しい政治的、經濟的乃至社會的な問題を資本主義社會に投げ與へてゐるが、而もこれらの諸問題中資本主義社會にとつて最も重大なものは、ソヴェート同盟の指導者達の「世界革命」といふ問題の取扱ひ方と、この取扱ひ方に於ける最近年の顯著な變化であらう。蓋しこの問題の取扱ひ方こそ、ソヴェート同盟の内外政策を一般的に規定し、一見不可解にみえる最近のその政治的、經濟諸政策を理解する鍵鑰であるからである。共產主義の究極的目的に就ては茲に言ふ迄もないが、この目的に到達する爲めには資本主義制の變革が必要とせられてゐる。而もこの過程は階級闘争を通じて行はれ、この闘争は世界革命に迄進展し、プロレタリアートの……といふ社會主義的過渡段階を通じて、人類を「ミレニウム」に迄導くといふのである。

併し乍ら斯くの如き、資本主義の變革が望ましいとするならば、現今資本主義諸國との平和的協力に基礎を置くソヴェート同盟の對外政策は如何に理解せらるべきものであるか。言ふ迄もなく第一次、第二次五ヶ年計は資本主義諸國よりの諸機械類の輸入、その諸種の技術的援助を必要とすることは多大である。これに必要な經費は大なる程度迄外國貿易に於けるその輸出に仰がれてゐる。

併しこれらのことは世界革命を凡ゆる手段を以て促進發展せしめるといふ共產主義の目的と兩立し得るものであるか。ソヴェート同盟に資本主義諸國の援助を以て社會主義を建設し、同時にこれらの諸國を……するといふことが可能であるか。資本主義との協力は共產主義からの離脱ではないか。これに對する解答こそ前述の世界革命の間

題であるが、この問題に對する露西亞共產黨及びこれが統制するソヴェート同盟の態度を現在に於けると、一九一七年十月革命に續く數ヶ年に於けるとを比較すれば、茲に頗る顯著な變化を發見し得るのである。勿論この變化の過程は決して平坦なものではなかつた。露西亞共產黨内部には十月革命後も現在に到る迄多くの問題に關する多くの論争があつた。併しそれらに於て、重要性和問題の範圍の廣範なることに於て最大なるものはこの問題であり、一時露西亞共產黨内の對立的二潮流であつたトロツキズムとスタリニズムとの闘争に於ても、これが最も重要な役割を演じてゐる。即ちこの問題に關する範圍に於て前者の「永久革命論」は後者の「一國社會主義建設論」と對立し、この兩者の闘争こそソヴェート同盟の對外政策及び世界革命の機關たるコミンテルンの生命を決するものであつた。

二

露西亞革命の最大指導者の一人であるトロツキが共產黨を除名せられ、ソヴェート聯邦を追放せらるゝ迄頑強に死守し、今尙これを主張して止まない永久革命論とは如何なるものであるか。一九二四年秋突如スタリンに依て主張せられ始めた一國社會主義建設論との對立及びトロツキの敗退に就ては後に述べる如くであるが、而も十月革命に續く數ヶ年間ソヴェート同盟の對外政策の基調をなしてゐたものはこの永久革命論の國際的主張であつたと謂はれてゐる。(註一)

永久革命の理論そのものは新しいものではない。トロツキはその著作「一九〇五年の露西亞革命」(一九二二年刊行)の緒言に於て次の如く述べてゐる。

・「一九〇五年二月二十二日と十月罷業との正にその期間に於て著者は『永久革命』と名づけられるところの、ロシアに於る革命的發展の性質に關する彼の見解を形成したのである……」(註二)と。即ち彼は露西亞一資本主義的發展に

於て後進的な、而して人口の壓倒的部分が農民と謂ふ小所有者階級に屬する——に於ける革命的發展の性質に就てこの理論を樹立したのであつた。而らば資本主義的後進國露西亞に於て社會主義革命は如何にして可能であるか、マルクスの言に「要するに産業の比較的發達した國は、この發達が比較的幼稚な國に對して、將來の状態を豫示するものである。」(註三)といふのがある。トロツキイは言ふメニシエギキはマルクスのこの言を無條件に採用し、後進露西亞は前進することなく、準備せられたモデルに唯從順に従へばよいと。マルクスの時代に於ては成程英吉利は佛蘭西の又甚だ尠ない程度に於て獨乙の將來を示してゐたが、露西亞及印度の將來を示すものではなかつた。併しこの言は資本主義の發展が凡ゆる國家を——その以前の社會形態と産業的水準とに拘らず——包括するに伴ふて適用性が減少すると彼は云ふ。又マルクスの他の言葉に「二つの社會構成はそこに發展の餘地ある總ての生産力が發展しない以前に破滅することは決してない。」(註四)といふのがある。メニシエギキはこれからしてロシアの資本主義はそれが西歐及び亞米利加の水準に迄到達するには未だ歩むべき長い路を持つてゐると結論してゐるが、トロツキイはこれを排斥してマルクスのこの言は決して簡別的な國に就てではなく例へば奴隸制度、封建制度、資本主義制と謂ふが如き一般的な社會的構成の順序に就て謂はれたものであるとなし、生産諸力は決して眞空に於て發展するものに非ずして、これより發生する階級闘争と他方資本主義の世界狀勢への依存性を無視することは出来ないとする。(註五)彼は言ふ「プロレタリアートは資本主義の發達に伴ふて増大し鞏固なものとなるであらう。この意味に於て資本主義の發展はプロレタリアートの……への發展である。併し乍ら労働階級が勝利する時期 (Tag und Stunde) は直接生産諸力の水準には依らず、階級闘争に於ける諸條件、國際狀勢と而して最後に一聯の主觀的諸契機例へば傳統、イニシアティブ、闘争の準備等に依て決せらるゝものである。従て經濟的に後進的狀態にある國に

於てもそのプロレタリアートは資本主義的により前進してゐる國に於けるよりも早く勝利に到達することがある。一國の技術的諸力又は資源へ、プロレタリアートの……を機械的に依存せしむる何等かの思想は極端に單純化せられた經濟的唯物論に基く一謬見である。」又曰く、「資本主義的自由主義の羸弱が無條件に労働運動の羸弱を意味することは露西亞の場合は正しいであらうか。工業プロレタリアートの數的強弱、その集中、その文化的水準、その政治的意義は疑もなく資本主義的工業の發展程度に依存する。併し、この依存性は決して直接的なものではない。與へられたる一定の時期に於て一國の生産諸力とその諸階級の政治的勢力との間には諸種の國民的、國際的性質の社會政治的要素が介入し、これが經濟的條件の政治的表現を歪曲し、或は全然變へるのである。合衆國に於ける工業の生産力が吾人のそれに比較して十倍も大なるにも拘らず、露西亞のプロレタリアートの政治的役割、國家政治に對するその影響、世界政治に對する來るべき將來の影響の可能性はアメリカのプロレタリアートの役割と意義とに比して比較ならぬ程強大なものである。」(註六)

以上の如くトロツキイは資本主義的後進國露西亞に於ける社會主義革命の可能性を指示してゐる。又吾人は後に見る如く、レニンもその帝國主義理論に於ける資本主義發展不均衡の法則に依て一國の資本主義的發展水準に直接依存することなく社會主義革命の可能性を示してゐる。これらの理論の當否は別としても、これによつて露西亞のマルクシストが西歐のマルクシストの持たなかつた理論的主張をマルクス主義に附加したのである。

永久革命論を分析すればそれは三つの簡別的理論より成立してゐる。(一)民主主義革命の社會主義革命への融合(二)社會主義的過渡段階を通じての社會自體の永續的變革、(三)社會主義革命の國際性である。(註七)

(一)所謂在來のマルクス主義者——露西亞に於ても、外國に於ても——は社會の歴史的發展に理論に於て、凡ゆる社

會は早晩民主主義形態に到達し、それより社會主義に前進するものであるといふ見解を懐いてゐた。唯この民主主義より社會主義への發展移行の過程に就ては種々見解は分歧してゐるが、その史的發展の理論に於ては異なる所なく民主主義と社會主義とは社會の歴史的發展の二段階であり、兩者は永い歴史の期間によつて判然明確に隔てられてゐるのである。例へばブレハノフの如き、彼は社會主義は現在の露西亞に於て可能であるといふ説をナンセンスなものとなし、又露西亞共產黨現在の指導者達にとつても社會主義の展望は一九〇五年に於けるのみならず、一九一七年十月革命の前夜に於ても「遠き將來の混亂せる音楽」に過ぎなかつたとトロツキーは謂ふ。誰か彼はこの見解を排してゐる。資本主義的發達とプロレタリアートの階級としての發展に關する彼の見解は前述の如くであるが、彼は資本主義的に後進的な近代諸國に於ける民主主義の勝利はそのブルジョア階級の階級としての羸弱と、運動を通じての民主主義的精神昂揚によつてそれが完成に到らざる以前に社會主義革命に移行し、轉化するものであるとする。従て露西亞の如き國家に於ては一般的な見解即ち民主主義と社會主義とは社會的發展に於て異なつた且つ遠く隔てられたる段階ではなくして、兩者は同一の歴史的過程にあり、前者は直ちに後者に導くものであるとする。

(一)社會主義的過渡段階に於ける不斷の：過程を通じての社會の變革といふことがこの理論の第二の特質をなしてゐるが、本論文の目的には直接的關係がないからこれは省略する。

(二)社會主義革命の國際性が主張せられてゐる。彼は云ふ、今日世界の凡ゆる國家は總ての點に於て密接なる相関を係に置かれてゐる。總ての國が世界市場を目的として生産し、地球の最も遠隔の地に惹起した經濟的變動によつても直接に影響せらるゝと同様に、プロレタリアートの階級闘争も世界的規模に於て行はるゝものである。勿論社會主義革命は一國に於て起され得るが、而もこの領域内に於ては成功的な結末に到達し得ない。現在のソヴェー

ト同盟によつて示されてゐるが如き、一孤立國に於けるプロレタリアートの獨裁は單に暫時的制度に過ぎず、而も斯る状態の下に於てはその國內的階級對立と外的國家的對立とは若干の先進國に於ける社會主義革命の實現に依て救援せられざる限り、必然的にこの孤立國を没落せしむるであらうといふ。斯る視點から彼は國家的：：は決して完結して一單位ではなく、それは國際的な環の一鎖である。國際：：は一時的退歩退潮があるかも知れぬが永續的過程であり且つあらねばならぬといふのである。

扱て民主主義革命が社會主義革命へ移行轉化し、革命がその發展に於て絶えず一段階から次段階へと前進するとす革命の永續性そのことそれ自體に對してはボルシェビキの理論家も別に異論はないのである(註九)社會主義革命が成就すれば政治的支配權はプロレタリアートが掌握する。茲にプロレタリアート：：が生ずるのであるが、これはプロレタリアートと非プロレタリアの勤勞大衆特に露西亞の如き國にあつては主として農民階級との同盟にその基礎を置くものとせられてゐる。

レニンは農民階級の革命的生長に希望を囑して、一九〇九年には「革命が：：といふが如き前進した段階に到達すればよりよく組織せられた強力な：：な農民政黨が創設せられるであらうことは疑もないことである。これを否定することは十分に成熟した人間の重要器官の一がその大いさ、形體、發達の程度等に於て幼時的状態に止まるといふと同様である」としてゐる(註一〇)併しトロツキーは農民階級に對して斯る希望を持たないのである。一九〇五年に於ける彼の言説にはプロレタリアートと農民階級との同盟、プロレタリアートの指導に對する農民階級の追従に就て觸れてゐるものがある。然し彼は特に社會主義：：の場合に於て兩階級の同盟、協力の持續を疑問とする。それは彼が(ロシアの)農民階級の革命的性質を極度に輕視するか乃至否定するからである。農民階級とは何であるか。

それは小所有者階級である。小所有者階級とは何であるか。社會主義の發展の立場から観るならば一つの反動勢力に過ぎない。従て一時プロレタリアートに合流した農民階級も暫くしてその階級の本質よりして、プロレタリアートに對する敵對者として現はれるといふのである。彼は前掲「一九〇五年の露西亞革命」の緒言に續けて「…この際彼等(即ちプロレタリアート)は鬭争の最初に彼等を支持してゐたブルジョアジーの總てのグループのみならず、更にその協力の下に彼等が勝利に到達したところの農民階級の廣汎な大衆とも敵對的な衝突に陥らなければならぬであらう。農民人口の壓倒的多数を持つ遅れた國に於ける労働者政府の地位の矛盾はその解決を唯國際的規模に於てのみ、プロレタリアートの…の舞臺に於てのみ見出すことが出来るであらう」といふのである。而して彼はレニン自身一九〇五年の民主主義革命に際して「プロレタリアートと農民との民主主義的…を掲げてゐるが、一度ブルジョア革命の時期がロシアに於て過ぎ去つたならば、其時はプロレタリアートと農民の合一的意志と謂ふが如きことに就て語ることもさへも滑稽なことであらう。」(註二)土地所有階級としての農民階級はブルジョアジーが民主主義のための鬭争に於て現在演じつゝある裏切的、不確定な役割を社會主義の爲めの鬭争に於て演ずであらう、それを忘却することは社會主義を忘却することである…(註三)といふ言葉を引用して、「ボルシェビズムの實際の傳統は労働者と農民との豫定せられた利害關係の調和といふが如き理論とは何等共通のものを持つてゐない。反對に斯るプチ・ブルジョアの理論の批判こそマルクシストのナロードニキに對する永い鬭争に於ける重要な要素であつた」(註四)として自説を擁護してゐる。

吾々は斯る見解の上に永久革命論に於ける革命の國際性が主張せられてゐるのを観るのである。その人口の壓倒的多数の部分が農民階級に屬し資本主義的發達に於て遅れてゐる露西亞の如き國に於ける社會主義革命はこれに續

して惹き起される西歐先進諸國に於ける社會主義革命に依て救援せられざる限り、斯る革命は不成功に終るといふのである。而も一九一七年に續く數ヶ年間事實上ソヴェート同盟はその國際政策の主力を世界革命特に西歐諸國の社會主義革命に注したのである。

(註一) Michael T. Florinsky. World Revolution and The U. S. S. R. p. 19.

(註二) Trotski, Die russische Revolution 1905. S. 6.

(註三) Marx, Das Kapital. Bd. I. Vorwort zur ersten Auf. Volkusgabe hrsg. v. K. Kausky. XXXVII. 高島繁之譯、資本論、第一卷第一册序文第六頁

(註四) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. Hrsg. v. K. Kausky. 8. Auf. 1921. LVI. 猪俣津南雄譯、經濟學批判、第五八頁。

(註五) Trotski, Geschichte der russ. Revolution, Bd. II. S. 674-75.

(註六) Trotski, Geschichte der russ. Revolution. Bd. II. S. 710. Auszüge aus der Arbeit von 1905 „Ergebnisse und Perspektiven“

(註七) Florinsky, ibid., p. 20.

(註八) Florinsky, ibid., p. 22.

(註九) フォーリンソン、ロシア共產黨の諸問題(スターリン、フォーリンソン全集著作集第十三卷)參看

(註一〇) Lenin, Vol. XI Pt. I. p. 230. cited by Florinsky, ibid., p. 25.

(註一一) Lenin, Saml. Werke. Bd. VIII. Die Revolution von 1905. S. 115.

(註一二) Lenin, ebenda. S. 166.

ソヴェート同盟に於ける「一國社會主義建設論」への思想的發展

註(三) Troski, ebenda, S. 680.

三

ソヴェート同盟の對外政策に於て世界革命の企圖が最も熾烈に現はれてゐたのは一九一八年から二〇年に掛けての時期であつた。獨軍は國境を突破してベトログラードに向つて進軍した。ドヴィンスク占領の報に接し、レニンは所謂左翼共產主義者とトロツキーの非妥協的主張を屈服せしめ、中央執行委員會は七對六の票決によつて對獨無條件講和を決議した。左翼共產主義者は當時埃太利と獨乙に勃發した罷業を以て革命の端初であるとして、決然世界革命を主張し、世界革命の機運は熟せるのみならず、既に開始せられたものとみたのであつた。トロツキーの態度は左翼共產主義者とは些か異つてゐた。彼は當時「戦争でもなく、平和でもなく」といふ標語を掲げてゐた。即ち「休戦を宣し、動員を解除するが、眞の平和を行はない」といふのである。彼のこの主張には獨軍は敢て露西亞に侵入しないであらうといふ目算が動いてゐたのであつた。

而るにトロツキーのこの豫想を裏切つて獨軍はロシアに侵入し、ソヴェート政權を危機に瀕せしめた。(註二)ブレスト・リトフスク條約に遂に一八年三月三日成立した。この講和がソヴェート政權をその没落から救ひ、中部歐洲に革命的宣傳の機を與へたといへ、その後ソヴェート同盟を非常な苦難に陥らしめた。即ちこの單獨講和に憤激した聯合國はソヴェートの國境を封鎖した。反革命軍は聯合國の援助を得て各地に蜂起した。斯くしてソヴェート同盟は二〇年秋内亂が終末を告げる迄殆んど外界から孤立の状態に置かれてゐたのである。而もこの時期に於ける程ボルシェビキの指導者達が世界革命の問題を最重要な問題として取扱つたことはなかつたと謂はれてゐる。勿論これは資本主義諸國のソヴェート同盟に對する否決的態度、ソヴェート聯邦承認の拒否といふが如き事情にも由つてゐたであ

らうが、併し、西歐資本主義諸國に於ける戦後の危機即ち政治的支配關係の弛緩、一般民衆の極度の窮乏特に敗戰國獨乙に於ける狀勢等に關聯して革命は極めて近き將來に切迫してゐるといふボルシェビキの指導者達の確い信念に基いていたことは言ふ迄もないことであつた。(註三)それは一九一九五月一日發刊の「コンミンニユスティツシ・インデルナチオナール」の初號に於けるジノヴィエフの論文「世界革命の展望」がよくこの事實を示してゐる。彼は次の如く言ふ。「……現在コミンテルンはその基礎として三つのソヴェート共和國即ちロシア、ハンガリ、ババリアを持つてゐる。併し、吾々の論文が印刷物として刊行せられる時には既に六つ或はそれ以上のソヴェート共和國を持つてゐる。舊歐羅巴は世界革命への路を急速に辿りつゝある。歐羅巴の運動はコミンテルンの莫斯科會議に於ける最大の樂觀主義者が豫想したよりも急速に發達しつゝあることは今日極めて明白である。……ハンガリーのブルジョアジーがその地位を去つたといふことは決して單なる局地的現象ではない、それは全く時代的特徴的兆候であつた。歴史的意味に於て歐羅巴の全ブルジョアジーはその地位を退き始めたのである。獨乙に於ける社會主義の勝利は全く不可避である。箇別的敗退はあるかも知れないが、終局的勝利は社會主義の側にある、このことは將來數ヶ月否恐らく數週間以内に行はれるであらう。運動は怖い程の速度を以て進行しつゝあり、吾人は充分なる確信を以て一ケ年以内に於て歐羅巴に社會主義の爲めの闘争があつたことを忘れるに到るであらうと云ふことが出来る。蓋し、一ケ年以内に全歐洲は社會主義となるであらうから、社會主義の爲めの闘争は亞米利加、亞細亞其他の世界各地に移されるであらう。……然し恐らく、又數ケ年間は社會主義歐羅巴と相並んで亞米利加資本主義が生存を續けるであらう、又英吉利に於ても資本主義は一二年間は其の生命を維持するであらう。然し斯る並存は永く持續し得るものではない。佛蘭西ブルジョアジーの代辯者ルトンの言を用ふれば資本主義合衆國と社會主義歐羅巴とは長期に亘つ

て並存し得ない……(註四)彼のこの言は現在となつては愕くべき空想的樂觀論であるが當時斯る見解は彼のみに限られてゐたものではなかつた。ブハーリンも同一の意見を述べてゐる。「現在に於て早晩世界戦争に迄發展しない大戦争はあり得ないし、又世界革命に迄進發しない大革命はあり得ないといふことは極めて明白なことである。……世界經濟の現状、その諸要素の相關々係、又組織せられたブルジョアジーたる諸國家の相關々係といふ事情の下に一國に於ける鬭争は他の文明諸國に於るそれに照應する鬭争者の勝利なくしては成功しないといふことは勿論の事である。我國の經濟發展の曲線は封鎖によつて拒否せられた原料、燃料等の技術的必要物が入手可能となるに到れば直ちに鋭い上昇を示すことは少しも疑ひない所である。而してこれは吾々の戦線の問題であり極めて一般的には世界革命發展の問題である」と(註五)以上のジノヴィエフ、ブハーリンの言説こそ一九一八—二〇年に於けるソヴェート同盟の大部の指導者達の一般の見解を代表してゐるところのものであり、その第一回第二回世界大會を通じてのコミンテルンの方針を最も良く示してゐるところのものであつた。ジノヴィエフがコミンテルンの議長であると同時にその指導的精神であつたことは茲に言ふ迄もないことである。

コミンテルンの創設に關する論述は省略する(註六)當時の西歐は戦後の危機に於て即座にも爆發し得る火藥庫の如きであつて、爲すべきことは世界……といふ爆發の爲めに燐寸を投じさへすればよい様な状態にあつた(註七)而も當時コミンテルンは成立後幾何もなく、又ソヴェート同盟内の一般状態も世界革命の明確な將來の計畫を樹立し得るが如きものではなかつた。従て第一回世界大會は大體最も單純な革命的宣傳を採つたのである。然るに前述の如き世界革命に對する樂天的期待は一九一九年も二〇年上半期に於ても實現せられなかつた。コミンテルン第二回世界大會は二〇年七月八月莫斯科とペトログラードに開催されたが而も斯る樂観的期待は第二回大會に於けると殆んど變

つてゐなかつた。(註八)コミンテルンはその創立大會以後歐洲及亞米利加に於て著しい吸引力を示して來た。大會直後イタリア社會黨、次で獨逸共產黨(スバルタクス・ブンドの改稱)五月にはノルウェー及びブルガリアの社會主義諸黨、同じく、六月にはスウェーデン社會黨左翼、ハンガリー共產黨がこれに加盟した。合衆國に於ても社會主義政黨の一部が分裂して共產黨を組織した。更に佛蘭西、西班牙、中央及南亞米利加に於てもサンデカリスト、無政府主義者が從來の傾向を棄て、新しいこの國際黨と協同しやうといふ氣勢を示して來たのである。舊第二インターナショナルは解體の儘未だ更生せず、如何なる國に於ても大小何れかの共產主義團體の存在しないものはなく、世界プロレタリアートの指導権は全然莫斯科に移つたかの如き觀があつた(註九)一方西歐に漲つてゐた戦後の革命的、状態は二〇年に至つて一層熾烈なものとなつた。二月バルカンに於ける總罷業、カッパ將軍のクーデター後三月ル地方に於ける共產黨の暴動、伊太利の大罷業と工場占領、五月佛蘭西の鐵道大罷業等々これらの事件が引續いて西歐の上下を震撼して、コミンテルンをして世界革命の機が切迫したことも思はしめたのである。特にソヴェート同盟の内部、状態もコミンテルンを勇躍せしむるものがあつた。第二大會迄に反革命軍は略掃蕩せられ、赤衛軍は波蘭の首都ワルシャオに肉迫し、この反動根據地を占領し更に伯林に進んで、西歐諸國の労働者と合流して、ソヴェート共和國を西歐に樹立する可能性が見えて來た様にも思はれた(註一〇)第二回大會々場の壁には露波戦線の大地圖が掲げられ赤軍の進軍が日々記入せられて、世界革命の運命はこの赤軍の前進に懸つてゐるものとせられてゐた。従て斯る状態はこの大會の決議及この大會で採用せられたコミンテルンの(暫定的)綱領に良く反映してゐたのである(註一一)この大會の重要議事はかの「二十一個條」の加盟條件の規定採用であつたが、その苛酷、嚴格なる諸條件も大會の背景をなした前記の如き客觀的状态を併せ考ふれば、斯る機運に於て右翼改良主義者或は中間黨に對し公然

と闘争を宣し、而もプロレタリアートの大衆をこれらから分離せしめて、自己の傘下にこれを獲得することが容易であるといふ樂觀的目算も充分にあつたと考へられるのである。但し、第二回大會は第一回大會に比較して世界革命到來の時機に關して些か慎重なる態度を探り、前回の豫言の失敗に鑑みてか、ジノヴィエフも、これが實現を數週數ヶ月以内ではなく二三年以内の將來と訂正したことは注目し得る。(註二二)

茲に一應ソヴェート政府とコミンテルンとの關係を述べて置く、世界革命の公然たる宣傳がその對外關係に於てソヴェート政府に不利を齎したことは一再ではなかつた。先づ前述の如く、最初は大戦直後の資本主義諸國による國境封鎖と反革命軍への援助等であつた、勿論これら諸國の行動は露西亞革命政府の生命を極めて短かいものと誤認したことに基ついてゐたであらうが、莫斯科から國境を越えてこれら諸國に向つて爲される革命的宣傳に對して異常の恐怖を持つたことにもよるものであつた。然るに時が経ち、世界革命も未だ實現しないとソヴェート政府は資本主義諸國に於ける革命運動を續行し、且同時に後述の如く、これら諸國と經濟的諸關係を結ばなければならなくなつてきた。この爲めに唱へ出されたのがコミンテルンはソヴェート政府とは獨立な存在であるといふ説である。即ち露西亞共產黨はソヴェート政府及びコミンテルンを支配するが後者は前者より獨立、無關係に存在してゐるものであり、従て、ソヴェート政府の指導者がコミンテルンに於て爲した活動に對してはソヴェート政府は責任を負ふものでないといふのである。これに關して甚だ興味あり、且注目し得るものは一九一九年十月に於ける外務人民委員長ゲオルグ・チチェリンの言葉である。彼は次の如く言ふ「コミンテルンの機關紙に寄稿する外務人民委員は彼が政府に於て占むる地位によつて或程度迄拘束せられてゐるといふことを考慮に入れて置かねばならない。この政府の地位は未だ政權に達してゐない革命黨に於ける地位ではないのである」(註二三)「ソヴェ

ート外交の役割は嚴密に防禦的であり且つ極めて責任的なものである。従て、吾人がコミンテルンの積極的任務に就て語る時も、吾人は共產黨とこれが支配するソヴェート政府とを同一視してはならない」と。(註二四)勿論このチチェリンの言はソヴェート政府とコミンテルンとの無關係といふ主張を資本主義諸國に納得せしむるが如き性質のものではなかつたが、而も莫斯科政府が後年屢々使用する言辭の基礎として注意すべきものであらう。

(註一) Lenin, Die nächsten Aufgabe der Sowjet-Macht. 參照

(註二) Florinsky, *ibid.*, p. 40.

(註三) Die Kommunistische Internationale. No. 1. 1919. Perspektiven der proletarischen Revolution. S. XII.

(註四) Sinowjew, *ebenda.* S. XIV.

(註五) Die Komm. Intern. No. 4. 1919. Bucharin. Die Diktatur des Proletariats und die Weltrevolution, cited by Florinsky, *ibid.*, pp. 44-45.

(註六) 拙著「國際社會運動(世界經濟問題講座第十回)參照

(註七) Florinsky, *ibid.*, p. 48.

(註八) Florinsky, *ibid.*, p. 54, 56.

(註九) Arthur Rosenberg, Geschichte des Bolschewismus. 1932. S. 133-34.

(註一〇) 拙著「前掲書第六十一頁 Lewis L. Lorwin, Labor and Internationalism 1929. p. 213-14. 參照

(註一一) Protokoll des 2. Weltkongresses der Komm. Intern. Hamb., 1921. Anhang. S. 705 ff. 參照

(註一二) G. Tschitscherin, Die Internationale Politik zweier Internationalen. (Die Komm. Intern. No. 6. S. 62-63.)

ソヴェート同盟に於ける「一國社會主義建設論」への思想的發展

四

一九二〇年十月ウランゲル將軍の反革命軍が掃蕩せられるに至つて、内亂は遂に終結をみたのである。この反革命運動の潰滅と共に聯合國のソヴェート封鎖も解かれた。その軍隊はアルハンゲルスク、オデッサ高架索其他から漸次引揚げられた。そして歐洲諸國は彼等が推測せる程にソヴェート同盟が薄弱な存在でないといふことを漸く認識する様になつた。

ソヴェート政府は勿論斯る状態の變遷に満足すべきであつたが、この成功に随伴した犠牲には實に甚大なるものがあつた。ソヴェート同盟内の全經濟機構はこの數ヶ年間の外國干渉、内亂の爲全く破壊せられ、國民の窮乏は異常に甚しく、事態はこの儘無事に経過し得ない程になつた。^(註二)暴動は各地に蜂起し猖獗を極めたが、遂に十月革命に於けるボルシエビキの精銳と稱せられ、強い革命的傳統を持つてゐたクロンシュタット要塞の水兵兵士が叛亂し、臨時革命委員會を組織してソヴェート政府に對立するに到つた。このクロンシュタットの叛亂は單に經濟的困憊のみを原因とするものではなく、それは「労働者反對」Arbeiteropposition(一九二〇—二一年)と同様漸くその頃からソヴェート政治機構の上に現はれてきた官僚主義に對する反抗であつたとみらるゝが^(註三)當時ソヴェート同盟に彌漫してゐた一般的困窮はこの叛亂を豫想外の規模に擴大せしめ、ソヴェート政權を危機に瀕せしむる危険に迄發展しないとは斷じ得ないのであつた。叛亂は政府の全力に依つて鎮壓せられた。然し、險惡なる状態はこれと共に消滅したものではない。レニンはこの叛亂によつてボルシエビズムと露西亞一般國民との深い背離の兆候を認識したとさへ謂ふものがある。^(註三)從て何等かの國內政策轉換の必迫が迫つてきたのである。茲に於てレニンは左翼共產主義

者の反對を押切つて、戰時共產主義から新經濟政策に退却した。市場は回復せられ、國內商業取引は或程度迄許可され、産業の私的經營の自由も擴大せられた。そして多數農民の不滿を緩和すべく食糧徵發制度は廢止せられ、現物課税制度(更に後には貨幣徵税制度)が採用せられた。ソヴェート政府は國內的にはこれによつて所謂「一息付く間」を得ることになつたのである。

一方當時の國際状態はソヴェート同盟に對して如何なるものであつたか。ワルソオに進軍した赤衛軍は其後間もなく撃退せられた。八月、九月には伊太利にロック・アウトに原因する金屬労働者の大罷業が起り革命に迄發展すると思はれたが勞資間の妥協によつて解決されて了つた。其他チェッコの労働者の革命運動(十二月)ドイツの三月暴動(所謂 März-Aktion 二一年)等々、到る處で行はれた斯る進撃は大體失敗に歸して終つた。前年旺盛であつた革命的機運は頓に衰へ始めて來た様でもあつた。^(註四)

コミンテルン第三回世界大會(二一年六月—七月)が開かれたのは斯る客觀的状态の下に於てであつた。第三回大會の問題の中心は是等の失敗殊に獨乙の三月行動の批判であつた。三月行動とは中部獨乙に於ける労働者と官憲との衝突に起因する局地的事件であつたが、獨乙共產黨はこれを楔機として全國總罷業を企圖して遂に失敗に終つたところのものである。此際獨乙共產黨の採つた指導理論は所謂「Offensivtheorie」であつて、これはコミンテルン第二回世界大會の決議に敢て牴觸するものではなかつた。第二回大會は即ち次の如く聲明してゐる。「世界のプロレタリアートは決定的闘争に直面してゐる。現在の時期こそ正に……の時期である。決定的期日は近づきつゝある。顯著な労働運動の行はれてゐる總ての國々に於て労働階級は激激な一聯の闘争の前に……起て」といふのである。然るに前年來幾多の失敗を経験したるコミンテルンの第三回大會はこの三月行動失敗の責任全部を専ら獨乙共產黨に轉嫁

し、これと關聯して、不用意の蹶起、一揆的冒險を排して、「大衆の中へ」といふ新戰術を標榜して、共產主義者は労働者階級の日常の平和的經濟闘争にも参加し、又労働者の凡ゆる團體例へば運動團體、音楽團體に迄も潜入し、これらを通じて漸次的摯拗な長期に亘る宣傳と大衆の獲得とに従事すべしとしてゐる。(註五)これはコミンテルンとして可成の變化である。そしてコミンテルン内部に於ても第三大會の斯るテーゼに對する反對が起つた。反對者は歐羅巴及び亞米利加に於る資本主義の内在的矛盾の擴大、一九年の講和條約による賠償の影響、貨幣制度の崩壊、失業の増大等を指摘して、革命的狀態、世界革命の時期の切迫は二〇年と同様であると力説する。即ち彼等によれば第二回世界大會と第三回世界大會との期間に於て世界の革命的狀態には些かの變化もないといふのである。(註六)

然し、假令世界狀態に變化がなかつたとしても、ソヴェート同盟自體は確かに變化した。ローゼンベルヒはこれに關し次の如く説明してゐる。「一九二〇年夏レーニンは世界革命を強力的に促進することによつて、例へば獨乙及び伊太利等の諸國に於てソヴェート同盟に味方する労働者政府が權力を獲得することを期待してゐた。コミンテルン第二回世界大會の諸決議に示された熱烈さはこの點から説明し得る。然るに二一年夏には露西亞は退却した。そして世界革命の進歩如何に拘らず、自己の生存を準備し始めた。而もレーニンは歐羅巴に於ける労働者革命の急速な成功を最早信じない様になつた。従て、獨乙の三月行動は第三回大會に對して一個の象徴的意義を持つてゐた。今や三月行動は世界大戰に始つた歐羅巴の労働運動に於る積極的革命的時期の總決算として現はれたのである。實際コミンテルンに對するその意義は唯それが恰も新經濟政策への轉換と時間的に略々一致してゐたといふことに存する。第三回世界大會は三月行動に於て舊い、今や時代に不適當となつた戰術の誤謬を實證したのである」と(註七)同時にコミンテルンの指導者達の言説にも世界……の實現がその第一回、第二回大會に於て期待せられた程近き將來に容

易には可能でないといふことが現はれ來たことも事實であつた。興味あるのはジノヴィエフの態度である。前年來の幾多の敗北に就てコミンテルンの指導は決して誤つてゐないことを主張し、(註八)更に數年來その革命的熱狂を辯護し而して「豫言者でない限り吾々は世界……の運命を實際に決定するところのプロレタリアートの勝利がこれらの重要な諸國の中の先づ最初の國に實現される迄幾ヶ月或は幾年を要するかを正確に言ふことは出來ない」と言ふに到つた(註九)

第四回世界大會(二二年一月一二月)に就ては別に特筆すべきものもない。これより第五回世界大會迄に十八ヶ月の歲月が流れてゐる。其間二三年一月には佛蘭西軍のルール地方占領とこれに端を發した同地方の共產黨の暴動、英吉利、佛蘭西、波蘭、チェッコ等に潮發した大罷業、バルカンに於ける政情不安、特にブルガリアに勃發した共產黨の指導による農民の暴動等又々一聯の事變が歐洲に繼起したのであつた。コミンテルンは茲に十月カール・ラデックを獨逸共產黨の顧問として派遣し、中部歐洲を中心として西歐革命を再び促進しやうとした。然しこの企圖も再び失敗に歸した。所謂ハンブルク十月暴動の失敗である。(註一〇)而るにその結果は從來コミンテルンの西歐に於ける最有力な足場であつた獨逸共產黨の勢力を痛く失墜せしむることとなり、これが、其後二四年に到つて漸く西歐にその兆候を示して來た資本主義の安定といふ客觀的状態と相俟つて爾後コミンテルンは西歐の革命運動から永く退却するの餘儀なきに到つた。

一方ソヴェート同盟の狀態には如何なるものがあつたか。新經濟政策はその後着々戰時共產主義時代の經濟的荒廢を著しく改善し、産業の再組織は次第に進捗しつゝあつた。これと共に時が經つにつれて新經濟政策に對する解釋も變つてきた。ブハリンは先づソヴェート同盟の責任ある指導者の中にさへ、從來新經濟政策を以て一箇の政治

的便宜手段としてプチ・ブルジョアの要素に對する適時の一讓歩であると辯護するものがあつたことを指摘する。彼は謂ふ、然しこれは現在に於て最早妥當でない。今日に於て新經濟政策は便宜の問題を全然離れて全面的にその正しさが立證せられた所のものである。彼に従へば新經濟政策に於て國家の統制する大企業は市場競争の機構を通じて私的小生産者に對して一つの闘争を行ひつゝあるのである。これは皮相的に視るならば資本主義社會に行はれてゐるところのものと相似てゐる。然し、根本的な差違が存するのである。この相違とはソヴェート同盟に於ては大企業は國家によつて即ちプロレタリアートによつて所有されてゐることである。従てプロレタリアートに屬する斯る大企業と私的小企業との競争は實際には革命的闘争であり、ブルジョアジーに對する階級闘争であると。即ち「市場の競争」と謂ふが如き散文的なことこそ階級闘争の特殊な全然新しい形態である」(註一)といふのである。

産業の再組織の過程は併し乍ら當時のソヴェート同盟の工業力よりすれば外國製生産用具の輸入、外國技術の援助、ソヴェート同盟の自然資源開發の爲めの外國資本の國內への誘致等々に俟つこと多大であるが、これらはソヴェート同盟と資本主義諸國との正常なる關係の下に行はるべき所のものであることは言ふ迄もないことである。既にソヴェート同盟は二年三月先づ英吉利、次でその他の歐洲諸國と通商條約を締結し、更に二四年二月には英吉利、伊太利と、十月には佛蘭西の正式の承認を得たのである(註二)

斯くして資本主義制打倒の爲めの闘争といふことは依然ソヴェート同盟の國際政策に於る重要な項目の一つではあるが、而もそれは前年に於けるが如き重要性は持ち得ないものとなつた。従てこのことはコミンテルンの政治的地位にも當然多大の變化を齎さざるを得ないのである。

吾々は第三回世界大會に於てコミンテルンの政策に重大な變化の萌芽が現はれ來つたことを述べた。而してこの

國際政策上の變化はソヴェート同盟の國內政策と緊密に聯關してゐることに就てローゼンベルヒの所言を引用した。而してこの國際政策と國內政策との相關を係は後にデノヴィエフに依つて更に強調せられてゐる。彼は二四年五月の露西亞共産黨第十三回大會に於て、これを次の如く述べてゐる「吾々はソヴェート同盟の國際政策がその國內政策に關聯してゐること今日程に密接であることは嘗つてなかつたことを記憶しなければならぬ。これは何故であるか。極めて近い將來に於て吾々は次の諸問題を解決しなければならぬであらうからである。即ち債務支拂、利子支拂の問題、外國貿易の獨占到於る讓歩如何の問題、穀物輸出量等の問題である。これらの諸問題はソヴェート同盟の對外政策のみならず又國內政策に於ける最重要なる部分である」と。そして彼はソヴェート同盟の對外政策を決定する四要素を指示してゐる。即ち(一)國際勞動運動、(二)狹義に於る外交、(三)外國利權の問題、(四)外國貿易と、これに關聯して穀物輸出の問題等である。(註三)

コミンテルンの第五回世界大會は二四年六月七月に開催せられたが、この大會こそプロレタリア運動の英雄時代が少くとも一時的にも終末を告げたことに公式の烙印を押したところのものであつた。(註四)この大會に於てデノヴィエフは數年來の世界革命に對するその觀測が明確に一個の幻覺に過ぎなかつたことを承認し、且つ甚しい悲觀的論調を以て第三回世界大會が二二年のうちに資本主義は完全に崩壊するといふ紙上の方式を持つたことは容易なことであつたであらうが、併し狀勢は第三回大會が豫見した如くは急速に發展しなかつた。従て若し現實に照應しないものであるとすれば斯る方式は吾々に何の益があらう。一般的に吾々は今や資本主義の崩壊といふ概念は非常な注意を以て扱はねばならぬことを識つた。資本主義の崩壊は不可避であらうが、併し乍ら吾々は事態を明確に視、且つ過去に於ける一層の注意を以て時間概念を取扱はねばならない」と謂つてゐる。(註五)

勿論近い將來に於る運動の展望に對する斯る失望といふものが直ちに闘争そのもの、放抛を意味するものではない。これは無論繼續せられるが、革命的状態が甚しく減退し、或は一時的にも消失した爲め世界革命といふ目標を些かでも遠い將來に置かねばならなくなつた時、常に同一の強度と生氣とを以て運動を繼續することは至難なことであらう。茲に手近な、具體的な目標が置かれるに到つた。この目標とはソヴェート同盟に於ける社會主義的建設といふことである。そして又この建設はスタリンの「一國社會主義建設論」にその根據を持つてゐるものであるが、この主張こそ二四年秋以來始つた露西亞共産黨内の對立、論争の中心をなすものであつたことは前にも一言した如くである。

スタリンの主張が勝利を占むる迄兩派の對立論争は約三ヶ年間繼續せられた。此間トロツキーはジノヴィエフ、カメネフ等によつて率らるゝ新反對派と反スタリン・ブロツクを結成し、兩者の論争はソヴェート同盟の總ゆる政治的集會を通じて行はれたが、その中最も劇烈に行はれたのは聯邦共産黨第十五回大會(二六年一〇—十一月)であつた。翌二七年十二月の露西亞共産黨第十五回大會に於ては既にトロツキー派の敗北は決定的なものとなつてゐた。論争の要點は來るべき將來に於けるソヴェート同盟の内外政策の基調は如何なるべきものであるか。世界革命に依る資本主義の打倒といふ究極的目的には變化ないとしても、現在の如き世界状態の下に一國に於ける社會主義的建設は可能か、然らざるかといふことに存する。若しこの可能性が否認せらるゝとしたならばソヴェート同盟の經濟的改造と謂ふが如きは著しく重要性を減じ、ソヴェート同盟の主力は事態の如何に拘らず、資本主義との闘争を通じて、それが崩壞の促進に注がなければならないことになる。これに反して、若し、資本主義的環境の裡にあつても、社會主義建設がソヴェート同盟一國に於て可能であるとするならば、その經濟的改造と謂ふことは一國の見地から

らも、又世界のプロレタリアートの見地からも全く新しい意義を持つ。即ち社會主義經濟建設の成功といふことはこれが資本主義經濟組織のうち内在する矛盾の諸現象と對照せられた時茲に世界のプロレタリアートを社會主義の側に誘導する大なる一杆桿ともなるといふのである(註一六)。

スタリンの主張を巡る論争もソヴェート同盟に於る他の問題に關する論争と同様その憑證をレニンに求めてゐる。主張者、反駁者ともにレニンの言説の援用解釋に努めて全體的に可成冗漫なものであるが、この問題を全面的に取扱つた聯邦共産黨十五回大會に於けるスタリンの「政治報告 反對派ブロツクと黨内の状態」(The Opposition Bloc and the Situation in the Party. Impekorr., Vol. 6. No. 77. Nov. 1926.)を基としてその主張を併せてこれに對するトロツキーの駁論(Discussion on Stalin's Report. Speech of Trotsky. Impekorr., Vol. 6. No. 79. Nov. 1926.)の論争に就ては更に Florinsky の前掲書を参照されたい。)を紹介する。

(註一) この時代が所謂戰時共產主義の時代であるが、その經濟的荒廢に就ては Ginko, Der Fünfjahrplan. 3. Aufl. S. 38. 参照。

(註二) Rosenberg, ebenda, S. 153-54.

(註三) Rosenberg, ebenda, S. 154-155.

(註四) 拙著前掲書第六十三頁 Lotwin, ibid., p. 219-20. 参照。

(註五) Florinsky, ibid., p. 96-98.

(註六) Rosenberg, ebenda, S. 162-63.

(註七) Rosenberg, ebenda, S. 163.

ソヴェート同盟に於ける「一國社會主義建設論」の思想的發展

- (註八) Florinsky, *ibid.* p. 88.
(註九) Snowjew. Die Taktik der Kommunistische Internationale. Die Kommu. Intern. Zweiter Jahrg, No. 18)
(註一〇) 拙著「前掲書第六十六頁 Lorwin, *ibid.*, p. 251.
(註一一) Fünfter Kongress der Komm. Intern. Protokoll. Bd. II. S. 522-25
(註一二) Florinsky, *ibid.*, p. 87.
(註一三) Florinsky, *ibid.*, pp. 109-110.
(註一四) Florinsky, *ibid.*, p. 110-111.
(註一五) Fünfter Kongress der Komm. Intern. Protokoll. Bd. I. S. 454.
(註一六) Florinsky, *ibid.*, p. 129.

五

スタリンは問題を次の如く提出する。即ち黨を反対派から分つ主要な問題はソヴェート同盟に於ては社會主義の建設は可能であるか?といふ問題であるが、この問題には三つの箇別の問題が包まれてゐる。即ち

(一)ソヴェート同盟は現在唯一の無産階級國家であり、凡ゆる國々に於て社會主義は未だ實現せられてゐない。世界革命のテンポは緩慢になつた。是等の諸事實を目前に置いてソヴェート同盟に於る社會主義の勝利は可能であるか。

(二)若しこの建設が可能とすれば、これを以て完全且つ決定的な勝利と謂ひ得るか。

(三)然りと謂ひ得ないならば、これが決定的な勝利となるためには如何なる前提条件が必要であるか、といふの

である。

スタリンは前世紀の四十年代五十年代乃至六十年代の總てのマルクス主義者トマルクス・エンゲルスをも含めて一は二國に於ける社會主義の實現といふが如きは明かに不可能な事であり、これが實現の爲めには同時に多くの國々に於て、尠くとも最も資本主義的に發達した一聯の國々に於て革命が起ることが必要であるとの見解を持つてゐたことを指示する。例へば一八四七年に書かれたエンゲルスの「……主義原理」にはこれを明確に述べてゐる一章句がある。

然し、スタリンによれば斯る見解は當時即ち資本主義の前帝國主義の時代、地球が未だ種々の金融群の間に分割せられず、又既に分割せられたもの、強力的再分割が資本主義の最大な問題ではなく、更に經濟的發展の不均衡が後期に於けるが如く尖鋭に現はれず、又現はれ得ず、資本主義の内在的矛盾が尙未だ股盛なる資本主義を没落の状態に陥れざる時代に於ては妥當であつた。併し乍ら新しい時代即ち獨占的資本と社會主義……との新しい關係の下に於ては既に斯る見解は正しくないといふのである。

茲に於てスタリンはマルクス、エンゲルスの死せる文字の奴隸となることなく資本主義の新しい、最後の段階としての帝國主義をマルクス的方法に於て分析究明し、そして個々の資本主義國に於る社會主義の勝利の可能性の問題を新しい形に於て提出し、それを積極的な意味に於て解決したものはレニンであるとする。そして彼はトロツキーに對するレニンの論文「ヨオロップ合衆國なる標語に就て」(一九一五年 Sozial Demokrat 紙掲載)を示す。この論文の二節にレニンは次の如く書いてゐる。

「然し、『世界合衆國』なる標語は、獨自家標語としては恐らく、間違つてゐるであらう。蓋しそれは第一に社會

ソヴェート同盟に於る「一國社會主義建設論」への思想的發展

主義と融合するからであり、第二には、それは一國に於ける社會主義の勝利の不可能であるといふ誤つた見解及び斯る國と他の國々との間の諸關係に就ての誤つた見解を惹き起すからである。

經濟的発展の不均衡は資本主義の無條件的法則であつて、このことから社會主義の勝利は最初は二三の若しくは唯一つの資本主義國に於てさへ可能といふ結果になる……」

然らばこの資本主義的發展の不均衡性から如何にして一國に於ける社會主義の勝利とい結論が生じてくるか。スターリンは謂ふ、この法則は次の諸點から出發してゐる。即ち舊い前獨占資本主義は既に帝國主義に迄成長してゐること、世界經濟が新しい領域、市場、原料の獲得の爲めの主要帝國主義群の間の激烈なる闘争の關係のもとに發展してゐること、帝國主義群の勢力範圍への世界分割は既に終つてゐること、資本主義諸國の發展は互ひに均衡を保つて進むものではなく、以前に前進してゐた個々の國々を驅逐して、そして新しい國々を第一線に高めることによつて躍進的に進むものであるといふこと。資本主義諸國のこの種の發展は不可避的に既に分割されたる世界の再分割の爲めの帝國主義諸國間の闘争を惹起する。この闘争は而して帝國主義を弱めて、帝國主義の世界的フロントはそれに關聯して、孰れかの國に於て、より容易に傷けられ、より容易に破壊せられるといふこと、その結果個々の國々に於ける社會主義の勝利は可能となるといふことがそれである、と。

續いてスターリンはレニンが以上の如く論じてゐた時トロツキーがレニンに對してなした反駁を掲げてレニンとトロツキーとの意見の相異を指摘してゐる。トロツキーは同じく一九一五年次の如くいつてゐる。

「……それぞれの國に於ける資本主義的發展の不均衡は全く争ふべからざる考へである。然してこの不均衡そのものも亦極めて不均衡なものである。英吉利、埃太利、獨乙若しくは佛蘭西の資本主義の水準は同一ではない。然し

亞弗利加、亞細亞と比較すれば、これらの諸國は皆緒に社會主義の機熟せる資本主義「歐羅巴」である。如何なる國もその闘争に於て他國を待つてゐてはならぬといふことは基本的思想であつて、それを繰返すことは、平行する國際的行動なる思想が苟も各國が拱手傍觀するといふが如き思想によつて代置せられない爲には、有効でもあり、且つ必要でもある。拱手して他國を待つことなく、吾々は國家的基礎の上に、吾々の創意は他の國々に於る闘争の刺戟となるといふ確信を以て吾々の闘争を始め、且つ繼續する。然し、若し然らずとすれば、例へば保守的な歐羅巴の目前の革命的な露西亞、若しくは資本主義的な世界に圍まれて孤立せる社會主義の獨乙が存續するかの如く考へるのは儚きことである」。(Programma Mira, 1917)

スターリンは尙言を續ける。レニンとトロツキーの以上の如き見解の相違は決して過去に屬し現在に於て消滅したものである。一九二一年レニンは新經濟政策の採用に當つて、これを以て社會主義の拋棄であると攻撃した一部の反對に對して、レニンは新經濟政策の採用は社會主義の途からの離脱ではなく、新しい關係のもとに於てその目的を繼續し、農民と緒に労働者階級の指導のもとに、ソヴェート經濟の社會主義的基礎を建設せんとするものであると力説したことを「現物税について」其他の新經濟政策に關する彼の諸論文を以て指示してゐる。又レニンは新經濟政策實施の一年後に於てソヴェート同盟の社會主義建設の問題に關する一演説に於て「社會主義は既に今日に於ては決して遠き將來の問題ではない、それは最早今日では決して抽象的な映像でもなければ、何等の聖像でもない。吾々は社會主義を日常生活に迄齎らした。吾々は協力して、新經濟政策の露西亞を社會主義の露西亞に變へるために、明日とはいはずとも二三年のうちに如何なる犠牲を拂つてもこの任務を解決する確信を以て演説を終る」といつてゐる。

言はこゝれに對する解答としてトロツキーは一九二二年彼の小冊子平和綱領(Programma Mira)の後言を發表しそのうちで彼は言ふ。「社會主義革命は一國に於て勝利を以て完成され得ないといふ『平和綱領』のうちで繰返へされた主張は二三の讀者にはソヴェート共和國の約五年に亘る經驗に依て論駁される様に見える。然し斯る結論は根據のないものであらう。或一國、而も遅れた國に於ける労働者國家が全世界に對してその地位を維持したといふ事實は、労働者階級の巨大な力を示すものであるが、他の發達した文明諸國に於てならばそれは眞に奇蹟さへも表はすことが出来ることを示してゐる。併し斯かる状態の下に於ては吾々は社會主義の創造には達してゐない、否吾々はそれに近寄つてもゐないのである。……他の歐羅巴諸國に於てブルジョアジーが政權を保持してゐる間は、吾々は經濟的孤立に對する跳きから資本主義世界との妥協を餘儀なくせられるであらう。而も同時にこの和解もあれこれの經濟的創痍を癒し、一步前進せしむるに過ぎないといふこと、そして露西亞に於ける社會主義經濟の現實的な發展は歐羅巴の主要な國々に社會主義革命が行はれた後初めて可能となるといふことは確信を以て言はなければならぬ」と謂ふのである。スターリンはこれらの言説と「一九〇五年の露西亞革命」の前掲緒言等を以てトロツキーの見解はレニンのそれと全然對蹠的相異あるものとしてゐる。

併しスターリンは是等從來のレニンの所言にもましてレニンが一國に於る社會主義の建設を説いたのは二三年即ち彼の死の直前に書かれ謂はゞ彼の政治的遺言とも看做るべき論文「ズハノフを駁す」及び「協同組合に就て」であるとする。

「協同組合に就て」に於てレニンは次の如く述べてゐる。「……總ての重要な生産手段を保持してゐる國家、數百萬の労働者階級によつて統制せられてゐる政府、労働者階級と數百萬の小農及び細農との同盟、この關係に於て労働者階級が指導的役割を保證せられてゐるといふこと、等、これら總ては吾々が以前には小賣商人として取扱ひ、そして或程度迄現在の新經濟政策のもとに於ても斯様に取扱はねばならぬ協同組合のみから一の完全なる社會主義社會を建設するに必要な一切ではなからうか。それは未だ尙社會主義社會の建設ではない、然しこの建設に必要な且つ充分な總てである」と。スターリンは是等のレニンの言説から彼が一國社會主義の建設の可能性を示し、且つこの建設を主張してゐたものであるとする。

扱てこの建設が可能であるとしても、これを以て社會主義の完全な且つ決定的な勝利と謂ひ得るか。これに對するスターリンの解答は否定的である。而らばこれを完全、決定的なるものとなす條件は如何。彼は謂ふソヴェート同盟は現在資本主義的環境のうちに存在してゐるが、斯る異つた二つの經濟的體制的並存には兩者衝突の危険が存在することも避け得られない、従つて尠くとも數ヶ國に於て社會主義革命が行はれて、斯る衝突からソヴェート同盟を救援する保證を造り出すことが必要條件であるといふのである。スターリンのこの主張に對してブハリン、モロトフ、或はオツシンスキー等各々熱心なる賛意を表明してゐる。

以上のスターリンの一國社會主義建設論は前述のトロツキーの理論とは全然調和し得ないものである。トロツキーは同じくこの第十五回大會に於てスターリンの主張を反駁する爲めにレニンの所言に援助を求めてゐる。然るにレニンの言説にはトロツキーの見解を裏書するが如き幾多豊富な材料が散在してゐる。トロツキーはそのスターリン攻撃を現在(一九三三年)に於ても放棄してゐない。彼はその著作露西亞革命史(Geschichte der russischen Revolution. Bd. II. S. 674 ff. 英譯 Vol. III. pp. 371-416)に於てレニンの言説のうち彼に有利なるものを豊富に蒐集してスターリンに抗争してゐる。

トロツキは一九〇五年に於けるレニンの一論文の草案の一節に「露西亞の労働者階級は既に社會主義革命の爲めその民主主義的成果を維持すべく闘ひつゝある。然しこの闘ひは露西亞のプロレタリアートのみでは望みなきものであり且つその敗北は必然的であらう。…若しも歐羅巴に於ける社會主義革命がこれを來り救はなければ…」と。更にレニンは云ふ「露西亞(民主主義)革命は…若しも西歐に社會主義革命が起らなければその達成を維持し鞏固にすることは出来ない。この條件がなければ土地の國有化これが農民への分割が行はれても反革命は必然である。蓋し、小所有者(農民)は土地所有の如何なる形式の下に於ても反革命の主動力であるからである」と。

トロツキに依ればソヴェート同盟成立後と雖もレニンは同一の見解を保持してゐたといふのである。レニンは一九一八年十一月「社會主義革命の完全な勝利は單に一國のみに於ては不可能である。それは露西亞を除いて、尠くとも數ヶ國の先進國の積極的協力を必要とする」と述べてゐるが、而もトロツキによればこの完全な勝利といふのはスタリンが意味するが如きものではなく、露西亞の資本主義的後進性から結果する内的矛盾は世界革命なくしては消滅し得ないことを示してゐるのであると謂ふのである。

更にトロツキの見解を支持する所のは露西亞共產黨第十回大會に於けるレニンの言説であるといふ。レニンは茲に於て次の如く述べてゐる。「發展した資本主義諸國に於ては數十年來發達し來つた被傭農業労働者階級が存在してゐる、この階級が充分に發達を遂げた國に於てのみ資本主義から社會主義への推移は可能である。併しこれは露西亞を意味してゐるのではない。露西亞に於ては工業労働者は少數であり、小農が怖ろしく多數であるといふことは吾々が從來屢々返し説いた所である。斯る國に於ける社會主義革命は二つの條件に於てのみ成功し得るものである。即ちその第一は若干の先進國に於る適時の社會主義革命による支持と、第二にはその労働者階級と農民の大

多數との提携である。…然し、この提携も他の國からの前述の援助が來る迄露西亞に於けるその達成を支へてゐるのみのものであることを吾々は識つてゐる」と。

更にトロツキはスタリンが「一國社會主義建設論」の不可抗的な憑證として示したレニンの「協同組合に就て」に對してもスタリンとは異つた見解を持つてゐる。トロツキに依ればレニンは茲に於て社會主義建設に必要な諸條件を列擧したに過ぎない、レニンは前掲の如く五つの條件を擧げてゐるが、この最後の協同組合のみが最も重大な意義を持つものでもない。例へばこれらの五條件がブルガリアに具備せられてゐたとしても、ブルガリアが一つの完全なる社會主義を建設し得るとは考へ得られない。或る特定の國に於ける社會主義の建設に必要な條件にはこの外その地理的位置、自然的資源、技術的知識、文化等々がある。従てこの場合レニンは政治所有、組織の形態に關する諸條件に就て言及したのみであつて、彼自身もこれらの諸條件のリストが完全、剩すところなきときは考へてゐなかつたであらう。協同組合論は彼の以前の見解を單に敷衍するに止まり、これを改變するものでは決してないといふのである。

續いて彼は二四年春迄はスタリンは彼の「一國社會主義論」を決して主張せず…併し乍ら社會主義の決定的な勝利、社會主義的生產組織の建設の爲めには一國特に露西亞の如き農業國の努力のみにては充分でない。それは若干の先進諸國の無産階級の努力をも必要とする…(O. Lenin: i Leninisme)といふが如きトロツキ自身と同一見解を持つてゐたことを指摘して、最後に彼は次の如く反問してゐる。よし一國に於ける社會主義建設の可能性を認めたとしても、其間に於て歐羅巴は如何に成り行くか。ソヴェート同盟の社會主義的建設は彼の推測によれば尠くとも三十年乃至四十年の歳月を必要とする、若しこの間に西歐に社會主義革命が起れば問題は自然解決する。然し

若し然らざる時には如何になるか。彼はこゝに三つの場合を示してゐる。

- (一)プロレタリアートとブルジョアジーとの現在に於ける均衡状態が繼續するものとする。而もこの均衡は頗る不安定なるものであつて、ソヴェート同盟の社會主義建設に必要とする期間中到底繼續する可能性はない。
- (二)資本主義が回復し、そして發展し続けるとする。然らば資本主義は未だその歴史的使命を完全に遂行したるものでないことが立證せられる。若しこの假定が正しいものとすれば現在の資本主義は未だ帝國主義即ち没落過程にある資本主義ではなく、上昇しつつ、その經濟と文化とを發展せしめつつある資本主義と解さなければならぬ。が若しこれが眞實であるならばソヴェート同盟は資本主義諸國によつて崩壊せしめらるであらう。
- (三)反之、資本主義は没落しつつあるものとするならば、社會主義の究極的勝利の爲めの努力が成功しない理由は決してない、と謂ふのである。

六

スタリン、トロツキー兩派の抗争は二十七年十二月の露西亞共産黨第十五回大會に於ける後者の敗北に終つた。勿論兩派の對立にはこの外諸種の問題があつたのであるが、その中この問題が最大なるものであつた。トロツキー派の敗北に就てはこれに到る迄に西歐資本主義安定の増大、とこれに伴ふ戦後の革命的機運解消の漸進といふ客觀的事情が最大なるものであるが、それと緒にスタリン自身が露西亞共産黨内部に持つ政治的實際勢力は絶対に看過し得ないものであらう。

扱て前述の如くレニン自身の言説のうちにも對立兩派に依て、ともに利用せらるゝ程の材料があるが、唯トロツキーに依て利用せらるゝものは概ね露西亞革命に續く數ヶ年の西歐の革命的機運の昂揚期に於けるところのものである。

る。レニンの思想もその晩年に到つては可成の變化があつたのである。

マルクス、エンゲルスはその「宣言」の露西亞版(一八八二年)の序言に於て次の如く云つてゐる。「本書の任務は現行制度の切迫しつゝあるその不可避的没落の宣言であつた。然し乍ら露西亞に於ては熱狂的躁急さを以て發達せしめられた資本主義的秩序と現在漸く形成せられつつあるブルジョア的土地所有と相並んで、土地の大半は農民の共同所有にある。さて、この露西亞の農民團體、自然的土地共有のこの既に著しく分解せられたる形態が直接に土地所有の高度の共産主義的形態に移行し得るか、或は又それがその前に西歐の歴史的發展に於て示された同一の解體過程を経なければならぬかといふ問題が生じてくるが、此問題に對する今日に於ける唯一可能な解答は次の如くである。即ち若しも露西亞革命が西歐の労働者革命に對する一烽火となつた場合は、その時は兩者は相補ふことになるであらう。斯る場合露西亞に於る土地共有は共産主義的發展の出發點として役立ち得るであらう」と(註)。この露西亞に於る土地共有の意義は嘗てナロードニキに依て過大な意義を與へられてゐたものであるが、露西亞革命勃發前にはこのナロードニキの、運動に於るその勢力は全く消失してゐたと謂ひ得るのである。唯マルクス自身は西歐のプロレタリア社會主義と相並んで露西亞に於る農業的社會主義の存在を認容してゐた。即ち彼は農業的基礎に於る露西亞の特殊的发展を承認してゐたのであつた。レニンは二三年農業協同組合を基礎としての社會主義への道程を確立したとされてゐる。然りとすればこれは上記のマルクスの指示と一致するものであるが、同時にナロードニキ的思想への一退却を意味するものに外ならない。彼が國粹主義者(ナロードニキ)と三十年の永きに亘るその政治運動を通じて痛烈に闘つた後、その生涯の終りに臨んで、彼等の思想に近寄りなければならなかつたことは些か悲劇的なことである。然し社會的發展の壓力は黨の意志よりも強力なものである、露西亞革命は封建制度と

私的大資本とを克服したが、而も革命が工業労働者のみによつて統御せられないとすれば、その中間の路を歩まなければならなかつた。茲に於て國家資本主義と農業協同組合とを基礎としたナロードニキ的色彩を帯びた露西亞的社會主義が樹立された。レニンは斯る路を準備し、スタリンはその路を歩んできた。レニンは二一年以來爾余の資本主義的世界の框内に於ける露西亞の發展に満足しなればならなかつた。故に若し、彼の最後の演説論文等
を注意深く検討すれば、如何に彼の思考が全く露西亞のみに集中せられ、彼が社會主義と呼稱するところのものを露西亞自身の力で建設せんとしてゐたかを識ることが出来る。トローゼンベルヒは謂つてゐる。註二)

スタリンは右の如くレニンに依て指示された路を辿つて來たとしても、このこと自體、世界革命實現の失敗によつて陥つた窮境からの抜路として現はれてゐる。故に露西亞共產黨はスタリンの主張を承認すると共に資本主義の安定といふ事實をも認めてゐる。即ちコミンテルン第五回世界大會が寧ろ認めることを欲しなかつたが如き態度を採つた資本主義安定の兆候は大會の前後から隨所に現はれて來た。ドーズ案の採用、獨乙に於ける馬克の安定、歐洲諸國に於る貿易好轉の兆、國際政治に於る平和的傾向等々がそれであり、これに伴ふ産業的回復は北米合衆國の經濟的勢力の擴大によつて一段と強められてきた、從て二五年十二月の共產黨第十四回大會はこの安定を假令相對的暫定的なるものとするにもせよ承認した。然し同時に黨及びその指導者の關心は國內問題に向けられてきた。五ヶ年計劃は、臚げながら既に水平線上にその姿をみせ、そして國民の興味と關心とは間もなく、これに集中されるに到つた。

然し乍らソヴェート同盟の國際政策はこれが爲めに直ちに急激な旋回を示した譯ではなかつた。コミンテルンが西歐革命運動から退却を餘儀なくせられたことは前述の如くであるが、この退却とともに手を付けてきたのが、支

那を中心とする亞細亞の民族運動であつた。一九二三年九月ミカエル・ボロヂンは國民政府の顧問として廣東に派遣せられてきて、間もなく支那革命運動の重要な役割を演ずる様になつた。運動は二七年迄繼續せられたが失敗に終つた。然し此間莫斯科の支那運動に對する熱意は頗る不十分なものであつたことが指摘されてゐる。註三)この失敗に關聯して二七年五月ドロッキ、ジノヴィエフは古參黨員五百人から結成された幹部反對派を代表して、スタリンのソヴェート内外政策を批判する一聲明書を發表して、又もや兩派の論争が惹き起された。この論争には今茲に觸れないが、兎も角支那革命の失敗がソヴェート同盟に於る社會主義建設といふ既定のプログラムに邁進する更に一つの有力な楔機となつたことは疑ひない所である。

コミンテルンの第六回世界大會は二八年七月八月莫斯科に開催された。前大會後に於る四ヶ年の經過の理由は別段説明せられてゐないが、露西亞共產黨の内部的對立、紛糾に起因することがその最も大なる理由の一で、この對立もその前年に於ける反對派克服によつて大體終末を告げたのであつた。

從て第六回大會を指導したものはスタリンとそしてプハリンとであつた。この大會が在來の諸大會に對して持つ特殊の意義はこの大會が初めてコミンテルンの綱領を決定したことである。從來コミンテルンは綱領を持たなかつた。第一回大會の「根本方針」や、大會毎に發表せられた「國際狀況とコミンテルンの任務」又はマニフェスト等がこの役目を果してゐたのであつた。第六回大會に提出せられ、決定せられた綱領は緒言の他六つの部分から成立してゐる。(一)資本主義的世界の體系その發展と必然的没落、(二)資本主義の一般的危機と世界……の最初の局面、(三)コミンテルンの究極目的「世界……主義」、(四)資本主義から社會主義への過渡期と無産階級……(五)ソヴェート同盟に於る……と國際社會……、(六)コミンテルンの戰略並びに戰術等がこれで消々數萬言を費した頗る長文のものであ

る。而も一八四八年の「……宣言」に於る革命的言辭はその儘の中に保存せられてゐるのである。トロツキイはこの綱領を評して凡ゆる種類の近代的（マルクス主義的）艦装を持った、然し乍らその大樺帆は改良主義と日和見主義との風次第に任せられてゐる「船舶に譬へてゐる。」（註四）それは兎に角として綱領に含まれてゐる革命的言辭はそれを言葉の儘理解し得べきものであるか。一九二七年十二月の露西亞共産黨第十五回大會の決議は次の如くである。「吾々は外國貿易の擴大、外國クレヂット、利權讓渡、外國の技術力の吸收等々、これらの關係がソヴェート同盟の經濟力の増大に貢献する限りに於て資本主義諸國との經濟的關係を最大限に發展せしめることに吾々の政策の基調を置かねばならない。吾々はソヴェート同盟を資本主義諸國から益々獨立的なものとなし、その工業的發展の爲めに社會主義的基礎を擴大しなければならぬ。斯る制限を以てのみ吾々の經濟的關係の最大限の發展を云々し得るのである」と。その經濟的建設を唯一の目的とするソヴェート同盟の對外政策はこの第十五回大會から今日迄この決議を基調としてゐることは言ふを俟たない。否それのみならず、五ヶ年計畫に着手してからの國際平和を強調する所説は或は「ブラウダ」に或は「イズベスチャ」に度々現はれてゐる。例へば三一年四月「イズベスチャ」には次の如き所説が掲げられてゐる。「ソヴェート同盟は欣んで爾餘の諸國とその經濟的關係を發展せしめ、且つこの經濟的關係の成功の爲めの必要な條件を創らんとするものである。わが社會主義國の經濟力の増大は世界市場へのその紐帶の強化によつて相伴はれるであらう。ソヴェート同盟と、その資本主義的環境とが平和的に並存する限り、この過程を阻止せんとすることは不可能である」と（註五）これによれば先にソヴェート同盟の資本主義體制よりの經濟的獨立といふが如きことも一の制限せられた意味に於て理解せられねばならないのである。

斯る言説と前述のコミンテルンの革命的言辭に充ちた綱領とは何れがソヴェート同盟の眞意を忠實に反映してゐるものであるか。

ソヴェート同盟は既に二七年ジュネーヴの經濟會議にその代表者を派遣してゐる。又三二年にはアムステルダム、リトワニヤと翌三三年にはワシントン、ラトビア、波蘭、佛蘭西等の諸國と不侵略條約を締結し、更にソヴェート・ダンピングの悪弊に基く諸國のソヴェート輸出品に對する差別的取扱或はその輸入拒否に怖れて三二年には國際聯盟の調査委員會に經濟的不侵略條約調書さへも提出してゐる。誰か斯る一聯の事實を觀ればその國內經濟建設の爲めの對外平和政策が眞の企圖であることが理解出来るのである。コミンテルンは二八年以後現在に到る迄遂に開かれてゐない。その第十二執行全委員會は三二年秋開催せられたが、そのテーゼ並びに決議は遂に「イズベスチャ」には掲載されず、其後「ブラウダ」に掲載せられたが、これは佛蘭西共産黨機關紙「リュウニヤ」(L'Humanité)からの轉載の形式を採つてゐた。勿論斯る方策はソヴェート政府とコミンテルンとの無關係を資本主義諸國に對して示さんとする努力の一端でもあらう。そのテーゼ及び決議も從來の諸大會執行委員會のそれに少しも新しいものを加へるものではなかつた。（註七）

ソヴェート同盟の對外政策はその成立以來以上の如き經過を閲して來たが、「一國社會主義建設論」の勝利と、これを基礎とする經濟的建設の進行に伴ふてその對外政策の基調が今後相當の歴史的期間に於て奈邊に置かれてゐるかは理解し得らるゝところである。然し同時にこゝに當然生ずる疑問はコミンテルン存在の理由である。資本主義諸國に於ける各國共産黨の勢力は現在著しい程度に迄低下してゐる。佛蘭西共産黨は分裂の結果として著しく少數となり、又ロミンテルンの最大支柱であつた獨逸共産黨も從來その活動の不活潑が報せられてゐたが、現在の狀態は獨逸の伊太利の共産黨の運命を辿り壊滅に瀕してゐる。其他西班牙、英吉利及び印度に於てさへもそれは殆んど無力に等しい狀態であると謂はれる。誰かこの事實は別としても從來ソヴェート同盟の對外關係は各國共産黨の存在に依つて決し

其利益せられてゐないのみか、反對に甚しく阻害されてきた。このことはソヴェート政府自ら充分識るところであつた。これが爲めソヴェート政府はそのコミンテルンとの無關係の主張といふが如き些か兒戲的努力をも拂つてきたのである。而も最近彌々無用となり、且それ自體各國共產黨の衰退によつて無力となつたコミンテルンをソヴェート同盟に結び付けてゐるものは何であるか。ソヴェート同盟はこれを將來に於て或は起り得べき資本主義諸國の萬一の對ソヴェート干渉の場合を慮つて拋棄しないでもあらうか。斯る觀方もあるが更に他の觀方もある。ローゼンベルとはこれをソヴェート同盟自體の勞働階級の關係に於て説明してゐる。彼は先づソヴェート同盟の政治機構に於る露西亞共產黨の官僚主義的獨裁とこの機構に参加してゐる少數のプロレタリアートを除外した一般のプロレタリアートの産業經營に於る自治權の喪失、その實質的賃銀の低下或は農業勞働者の劣悪な生活條件を指摘してソヴェート同盟が勞働者國家であるといふことを否認してゐる、彼は謂ふ「レニンの露西亞には一九二二年以來國家資本主義的現實とプロレタリア的的神話が並び存してゐる」と(註九)彼に従へばソヴェート同盟とコミンテルンを結び付けてゐるものも同じくこの神話であつて、これこそボルシェビズムが露西亞内部に於て不可缺のものであり、特に二八年以來その對内政策に於て増大してきたところのものである。彼は謂ふソヴェート同盟がコミンテルンを放棄しない限り、國際勞働者階級、尠くともその一部のものは神話的傳説と化した露西亞に於るプロレタリアートの獨裁といふことを認めなければならぬ立場に置かれてゐる。反之若しもコミンテルンを放棄し、國際勞働者階級全體がソヴェート同盟が勞働者國家たることを否認しそのプロレタリアートの獨裁と、いふことが一神話に過ぎないといふことを公認するに到ればソヴェート政府とソヴェートの勞働階級との關係は危機に陥るといふのである(註一〇)現在のコミンテルンの存在を説明する一見解でもある。現在に於てコミンテルンの存在は一つの「ディレンマ」である。世

界狀勢に變化なくソヴェート同盟がその經濟的建設を唯一の目的としてゐる間はコミンテルンはソヴェート同盟にとつては對外的には無用の存在であり、ソヴェート同盟がこれに對して積極的態度を示さざる限り、解體的狀態と等しきものに迄なるのではなからうか。

(註一) Zinert bei Rosenberg, ebenda, S. 176.

(註二) Rosenberg, ebenda, S. 176-77.

(註三) Florinsky, ibid., p. 173.

(註四) Trotsky, L'Internationale Communiste après Lenin, cited by Florinsky, p. 194.

(註五) Cited by Florinsky, ibid., p. 218-19.

(註六) Florinsky, ibid., p. 228.

(註七) このテーゼ並に決議に對して Florinsky, ibid., pp. 242-44. 參照。

(註八) Rosenberg, ebenda, S. 226-27.

(註九) Rosenberg, ebenda, S. 173.

(註一〇) Rosenberg, ebenda, S. 178.

一九三四年、四月、十二日